＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

♪どれみふぁそったくん♪

～子どものためのアウトリーチ～

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第１章　プロジェクトの概要

１．プロジェクトの名称・目的と方法

（１）名称

♪どれみふぁそったくん♪

～子どものためのアウトリーチ～

（２）目的

地方の小学校、及び福祉施設の子どもなど、普段生の演奏を聞く機会の少ないと思われる子ども達に向けて出張で演奏会を行い、子ども達にとってよき音楽体験となる機会を提供する。

ただ聴くだけの鑑賞会にとどまらず、楽器のしくみや音楽の歴史について知るなど学習の面を持ち、生涯学習としての視点を意識し音楽に関わることのできる場面を設けるなど、よき音楽体験として子どもたちに変化をもたらす機会となり得るよう留意する。

また、それぞれのニーズにどう応じられるか、主催する側の意向をどこまで実施できたか、実践を通して報告する。

今年度は、音楽会の開催だけでなく授業の中に入ったり福祉施設へ訪問したりと、昨年度よりもさらに活動の幅を広げていきたい。

（３）方法

①実施先とアポイントメントを取る。現場のニーズを把握する。

②現場のニーズに応じた授業や演奏会の企画案を作成し、実施に向けた準備をする。

③現場の方に企画内容を確認して頂き、企画案を修正し改善案を作成する。

④実施後、映像記録や子どもへのアンケート結果から、現場のニーズに応えられているか、学習の面はあるか、参加型であるかという３つの視点から分析を行う。

２．代表者及び構成員

・代表者（代表・運営・演奏）

西行仁美　　音楽教育専修１回生

肥後結美子　音楽教育専修１回生

・構成員（運営・演奏）

安藤光平　　音楽領域専攻３回

後藤佳歩　　音楽領域専攻３回

中村安穂　　音楽領域専攻３回

谷口沙也佳　音楽領域専攻２回

中村来実　　音楽領域専攻２回

（演奏）

川口紗梨　　音楽領域専攻卒業生

安井晴二　　音楽教育専修３回生

宮側拓哉　　音楽領域専攻卒業生

松井麻弥　　音楽領域専攻４回生

榎木薗直子　音楽領域専攻３回生

後野あおい　音楽領域専攻３回生

多胡舞香　　音楽領域専攻３回生

竹村紅美　　音楽領域専攻２回生

丸尾瑳弥香　音楽領域専攻２回生

岩崎章泰　　音楽領域専攻１回生

小林佑平　　音楽領域専攻１回生

高垣美久　　音楽領域専攻１回生

田村菜々　　音楽領域専攻１回生

中島廣斗　　音楽領域専攻１回生

西村潤之介　音楽領域専攻１回生

３．助言教員

田邉織恵先生（音楽科）

４．アウトリーチについて

Out（外へ）reach（手を差し出す）という意味の英語である。元々社会福祉の分野で行われる地域社会への奉仕活動や教育普及活動などの意味で用いられていた。現在では、現場へ出向いて活動す

る「訪問 ○○」「出前○○」といった受け手のニーズに合わせた取り組みも指す。(1)

音楽分野でのアウトリーチ活動とは，音楽家や音楽団体などが音楽に普段触れる機会の少ない人々に働きかけ，音楽を普及することであり，さらに提供者と享受者が対等な立場で一緒に楽しむという双方向的なスタンスが特徴である。

第２章　内容・実施経過

（４月）・研究目的、企画案の検討
・京都教育大学幼児教育専攻企画「うたとおはなしの会」　打ち合わせ
・京都教育大学幼児教育専攻企画「うたとおはなしの会」　参加
（６月）・各小学校への電話による連絡
・伏見板橋小学校への訪問
（７月）・伏見板橋小学校への訪問・打ち合わせ
・醍醐小学校への訪問・打ち合わせ
・嵯峨野小学校への訪問・打ち合わせ
（８月）・深草児童館への挨拶、訪問
・醍醐小学校　訪問演奏
（９月）・醍醐小学校　歌唱指導
・深草児童館　訪問演奏
（10 月）・深草児童館　訪問演奏
（11 月）・南浜児童館　訪問演奏
・深草児童館　訪問演奏
（12 月）・京都教育大学幼児教育専攻企画「うたとおはなしの会」　参加
・伏見板橋小学校　訪問授業
・深草児童館　訪問演奏
（１月）・醍醐小学校　訪問演奏
・嵯峨野小学校　訪問授業
・e-Project 研究発表会
（２月）・伏見板橋小学校　訪問授業（予定）
・亀岡市の小学校　訪問授業（予定）

第３章　実施結果・分析

１．京都市立伏見板橋小学校

（１）実施までの流れ

二年前の本プロジェクトでお世話になった先生にご縁を賜り、依頼をいただいた。

最初は電話にてご挨拶をさせていただき、8 月に訪問・打ち合わせ等を行い、音楽室を見学させていただいた。訪問以降の授業の推敲は、電話やファックスで行った。

なお授業については、本プロジェクトのメンバーが授業案の考案、教具やワークシート等の作成、授業者を務めた。

（２）実施内容

１）授業①

①日時　　2018 年 12 月 18 日（火）
10：40～11：25（3 校時）

②対象　5 年生

③ねらい

日本の歌曲の詩やせんりつの美しさを感じとり、声の種類や演奏の形のちがいが生み出すよさを味わおう

④演奏曲目

《赤とんぼ》山田耕筰作曲
《この道》山田耕筰作曲
《ふるさとの四季》源田俊一郎編曲より抜粋
・《紅葉》高野辰之作詩／岡野貞一作曲
・《冬景色》文部省唱歌
・《雪》文部省唱歌
・《故郷》高野辰之作詩／岡野貞一作曲

⑤演奏者・授業者等

宮側拓哉（ピアノ）、西行仁美（授業者・ソプラノ）、肥後結美子（授業補助・アルト）、安藤光平（バス）竹村紅美（ソプラノ）、丸尾瑳弥香（アルト）、岩崎章泰（テノール）

⑥展開

1 《赤とんぼ》を全員で歌う。
2 ソプラノ、アルト、テノール、バスによる《赤とんぼ》の生演奏を聴き、それぞれがどんな声だったか、周りと交流し全体で共有し、声の種類について

知る。

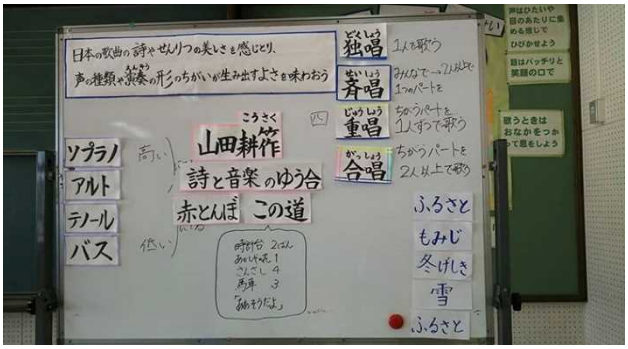
3 《赤とんぼ》が山田耕筰の作曲であることを確認し、山田耕筰が世界的水準の作曲家であり、「詩と音楽の融合」をはかり素晴らしい作品を多く生んだことを知る。

4 山田耕筰の代表作《この道》を生演奏で聴き、詩と音楽の世界を味わう。

5 《故郷》のワンフレーズを独唱、斉唱、重唱、合唱で聴き、それぞれの違いや良さを考えることで、歌声による演奏の形を知る。

6 《ふるさとの四季》より抜粋《紅葉》《冬景色》《雪》《故郷》を聴くことで、日本の古くから存在する曲に親しむと同時に、独唱、斉唱、重唱、合唱の良さを味わう。

9 声の種類や歌声による演奏の形についてのワークシートに記入する。



実際の板書

（３）分析と考察

・視点①　現場のニーズに応えられているか

現場のニーズとして、「色々な音域の声を生で聴かせたい」「文部省唱歌の曲を扱ってほしい」があった。これについては、ソプラノ、アルト、テノール、バスの４種類の声による生演奏を授業で扱えたこと、また、歌声による演奏の形の学習で《紅葉》《冬景色》《雪》《故郷》を曲目に演奏したことで、応えることができたと考える。

・視点②　学習の面はあったか

めあてを「日本の歌曲の詩やせんりつの美しさを感じとり、声の種類や演奏の形のちがいが生み出すよさを味わおう」とし、授業を行った。「声の種類」「山田耕筰」「歌声による演奏の形」を学習内容の軸とした。以下、子どもたちが記入したワークシートにあった記述である。

「声の種類」に関する記述には、「歌い方や声の重なり、音色がちがうだけで歌の感じが変わる事がわかりました」「バスの人の声がとてもひびいていて、きれいでした」などがあった。

声の種類を聴き比べる場面。
左からバス、テノール、アルト、ソプラノ。

「歌声による演奏の形」に関する記述には、「演奏の形を変えると曲の印象が変わる」「演奏の形を分けて歌うと同じ曲でもちがう曲に感じた」「私は最後の演奏そうが印象にのこっています。色々な声の種類のちがいをさがしながらきけたからです。」「重唱と合唱のちがいの２人以上で歌うのか、１人で歌うのかで、重唱と合唱とちがうようになるということを身をもって体験して分かりました」などがあった。

声による演奏の形（独唱・斉唱・重唱・合唱）をすべて盛り込んだ《ふるさとの四季》抜粋の演奏。文部省唱歌《紅葉》《冬景色》《雪》《故郷》をメドレーで演奏した。

その他にも、授業を考案した側が意図しなかった学びとして、歌の演奏面における学びがあったことが、ワークシートから読み取れた。以下は実際の記述である。「クラスに合唱があるけど、『口を大きくたてに開けて』は毎回言っていて、歌が上手い人はちゃんとやってるんだなと思った。」「いつも学校で言われているけれど全ての人が口をしっかりあけてすごかったです。ぼくが知っているいわゆる『お手本』の歌がとてもま近で聞けて貴重な体験になりました。」

・視点③　参加型であったか

授業の中では、《赤とんぼ》を一緒に歌ったり、4種類のそれぞれの声による演奏や、独唱、斉唱、重唱、合唱それぞれの演奏を聴いて「どのような感じがしたか」「どんなよさがあると感じたか」などを考えながら、聴いたり発言したりする場があった。授業者の発問に対する挙手の数も大変多く、ワークシートへの記述からも、多くの児童が授業に参加していたと捉えることができると考える。

２）授業②

①日時　　2018年12月19日（水）
　　14：45～15：30（6校時）

②対象　3年生

③ねらい

トランペットやホルンの楽器のしくみをしり、音色のちがいをかんじとろう

④演奏曲目

《トランペット吹きの休日》アンダーソン作曲
《展覧会の絵》ムソルグスキー作曲
《A Song　For　Japan》スパーク作曲

⑤演奏者・授業者等

川口紗梨（トランペット）、西行仁美（授業者）、肥後結美子（授業補助）、高垣美久（授業補助）、田村菜々（ピアノ）、**西村潤之介（ホルン）**

⑥展開

1 CD音源で《トランペット吹きの休日》《「12の二重奏曲」からアレグロ》を聴き、どちらの曲がどちらの楽器の曲だったかを予想する。
2 トランペット・ホルンの音色を確認する。
3 《トランペット吹きの休日》の生演奏を聴き、気づいたことや感じたことを発表したり交流したりすることで、トランペットの音色を味わう。
4 《展覧会の絵》の冒頭部分をトランペットとホルンの生演奏を聴き、トランペットとホルンの音色を聴き比べる。
5 トランペットとホルンの音色のちがいなど、聴き比べて気づいたことを発表する。
6 トランペットとホルンの楽器の仕組みを知る。
9 《A Song　For　Japan》を生演奏で聴くことで、ホルンの音色を味わう。
10 授業の感想を発表する。
11 トランペットとホルンの音色についてのワークシートに記入する。

（３）分析と考察

・視点①　現場のニーズに応えられているか

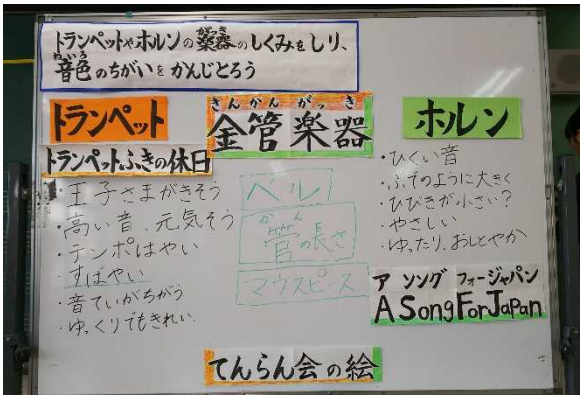
現場のニーズとして、「楽器の音色を生で聴かせたい」があった。これについては、トランペットとホルンの両方の楽器の奏者に協力してもらえたため、どちらの楽器の生演奏も聴かせることが実現可能となった。校長先生から「今日のこの授業のことは子どもたちは一生忘れないでしょう」というお言葉をいただけたことからも、現場のニーズに応えることができたと考えている。

・視点②　学習の面はあったか

めあてを「トランペットやホルンの楽器のしく

みをしり、音色のちがいをかんじとろう」と設定し、トランペットとホルンの音色の違いを聴き比べ、それぞれのよさを味わうことをねらいとした。

子どもたちの発言には、トランペットの音色については「王子さまが来そう」「元気そう」「高い音」「すばやい」、ホルンの音色については「筆のように太い」「低い音」「優しい」「ゆったり、おしとやか」などがあった。



実際の板書

また、同じ金管楽器という仲間でありながらここまで音色の違いが生まれるのがどうしてか、という切り口から、楽器のしくみについて触れる機会を設けた。具体的には、楽器の形を見て違うところはどこかを問い、「管の長さ」「ベルの大きさ・向き」といった仕組みの違いに着目させた。

また、金管楽器がマウスピースを使って唇を震わせて音を出す楽器であることを紹介し、実際にマウスピースのみの演奏も行った。

↑それぞれの楽器の管の長さをテープで表した。
トランペットは１ｍ、ホルンはなんと５ｍもある。

マウスピースのみの演奏。子どもたちの周りを回りながら

・視点③　参加型であったか

子どもたちは、トランペットとホルンの音色の違いを意識しながら演奏を聴いたり、どう違ったかを発言したりしていた。また、楽器のしくみについて知る場面では、管の長さをテープで表す場面で子どもに参加してもらう場を設けた。楽器を見せたり、マウスピースのみの演奏では、奏者が子どもたちの周りを回りながら行うことで、できる限り子どもたちが間近で音楽体験ができるように心掛けた。これらのような姿から、多くの子どもたちは授業に積極的に参加していたと捉えることができると考える。

２．京都市立嵯峨野小学校

（１）実施までの流れ

本学の西井薫先生に本プロジェクトを紹介していただき、ご協力いただく運びとなった。

最初は電話にてご挨拶をさせていただき、7 月に訪問・打ち合わせ等を行い、音楽室を見学させていただいた。訪問以降の授業の推敲は、電話やファックスで行った。

なお授業については、本プロジェクトのメンバーが授業案の考案、教具やワークシート等の作成、授業者を務めた。

（２）実施内容

１）授業①

①日時　　2019 年 1 月 16 日（水）
　　13：50～14：35（5 校時）

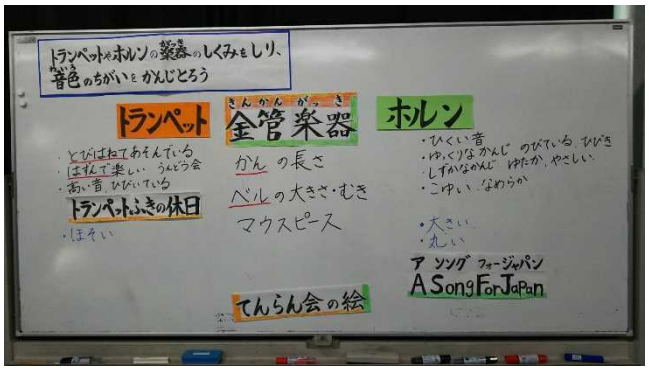
②対象　3 年生

③ねらい
トランペットやホルンの楽器のしくみをしり、音色のちがいをかんじとろう
④演奏曲目
《トランペット吹きの休日》アンダーソン作曲
《展覧会の絵》ムソルグスキー作曲
《A Song　For　Japan》スパーク作曲
⑤演奏者・授業者等
　川口紗梨（トランペット）、西行仁美（授業者）、肥後結美子（授業補助）、田村菜々（ピアノ）、**西村潤之介（ホルン）**
⑥展開

２．伏見板橋小学校（２）実施内容と同様のため略

《トランペット吹きの休日》の演奏

（３）分析と考察
・視点①　現場のニーズに応えられているか
　現場のニーズとして、「単元としては既習だが、改めて実際の楽器の音色を聴かせてほしい」があった。上記と同様、トランペットとホルンの両方の奏者に協力してもらえたため、このニーズにも応えることができた。
・視点②　学習の面はあったか
　学習内容についても上記と同様である。ただ、管の長さをテープで表す場面では、授業を行った教室の形が横に長く、テープの長さがわかりやすく提示できたため、子どもたちの反応も大きかったように感じた。



実際の板書

・視点③　参加型であったか
上記同様、発言や交流があったこと、管の長さをテープで提示する際のお手伝いを呼び掛けた時の挙手の数が多かったことなどから、子どもたちが授業に参加している姿が見られた。

２）授業②
①日時　　2018 年 12 月 19 日（水）
　　14：40～15：25（6 校時）
②対象　4 年生
③ねらい　フルートとクラリネットのせんりつや音色のちがいを感じとろう
④演奏曲目
《クラリネットポルカ》ポーランド民謡
《「アルルの女」第二組曲からメヌエット》ビゼー作曲
《故郷》高野辰之作詩／岡野貞一作曲
⑤演奏者・授業者等
　西行仁美（授業者）、肥後結美子（授業補助）、小林佑平（フルート）、中島廣斗（クラリネット）
⑥展開

1 CD 音源で《「アルルの女」第 2 組曲からメヌエット》《クラリネットポルカ》を聴き、どちらの曲がどちらの楽器の曲だったかを予想する。
2 フルート・クラリネットの音色を確認する。
3 《故郷》の冒頭部分の、フルートとクラリネットの生演奏を聴き、フルートとクラリネットの音色を聴き比べる。
4 《「アルルの女」第 2 組曲からメヌエット》を生演奏で聴くことで、フルートの音色や旋律を味わう。

5《クラリネットポルカ》を生演奏で聴くことで、クラリネットの音色や旋律を味わう。
6フルート、クラリネット、オーボエなど木管楽器の音の出る仕組みを知り、ビンとストローで、それぞれフルートとオーボエの音の鳴らし方を体験する。
7フルート、クラリネットの旋律の特徴が音の出るしくみに関係していることに気づく。
10授業の感想を発表する。
11フルートとクラリネットの音色についてのワークシートに記入する。

（３）分析と考察

視点①　現場のニーズに応えられているか

現場のニーズとして、「楽器の音色を生で聴かせたい」「できれば両方の楽器の生演奏をしてほしい」があった。これについては、フルートとクラリネット両方の奏者を確保できたことから、現場のニーズに応えることができたと考えている。

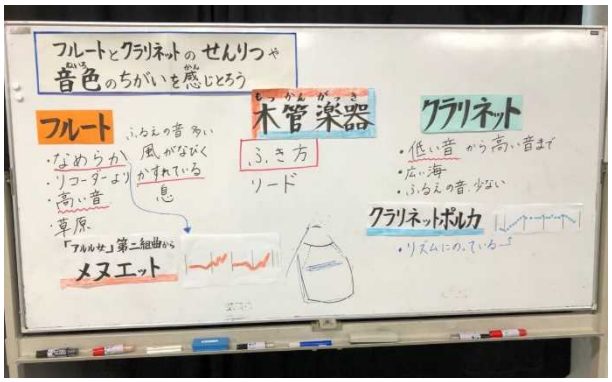
フルートとクラリネットの音色の比較

視点②　学習の面はあったか

めあてを「フルートとクラリネットのせんりつや音色のちがいを感じとろう」と設定し、フルートとクラリネットの音色を学習内容を軸としながら、それぞれに特徴的な旋律、またなぜその旋律を得意とするのかを楽器のしくみとの関係と結びつけて考えることまでがこの授業の学習面と言える。

木管楽器の音の鳴らし方を３種類紹介し、その中からフルートの音の鳴らし方を３名の児童に、オーボエに用いられるダブルリードの鳴らし方を全児童に体験してもらった。家庭でも気軽に触れられるビンとストローを用いた。この体験が楽器に興味をもつ機会となれたなら、生涯学習の視点からみても学習の面があったと言えるだろう。

フルートとクラリネットの音色の比較では、「フルートは音が鳴っているの場所が草原で、クラリネットの音が鳴っている場所は広い海っていう感じがする」「フルートは風がなびいてるみたいな音」という感受の発言もあった。また、「フルートはなめらか」「クラリネットはリズムにのっている」といった旋律の特徴に触れている発言もあった。



実際の板書

視点③　参加型であったか

子どもたちは、フルートとクラリネットの音色の違いを意識しながら演奏を聴いたり、どう違ったかを発言したりしていた。

また、楽器体験という参加の場を設けた。フルートの鳴らし方は３名しか体験させてあげられなかったが、ダブルリードの体験は全児童にさせてあげることができた。参加型の授業という点では、参加できる場面を多く取り入れられた授業であったと考えている。

３名の児童が挑戦したフルートの音の鳴らし方の体験。ビンの蓋に唇を当てて音を鳴らそうとしている。

３．京都市立醍醐小学校

（１）実施までの流れ

醍醐小学校は、本学教員の西井薫先生に我々の活動を紹介していただいたところ、ご協力いただける運びとなり、依頼をいただいた。

（２）実施内容

１）

①日時　　2018　8 月 27 日（水）9：15〜9：30
　　9 月 6 日（木）8:30〜8:40
　　9 月 18 日（火）8:30〜8:40
　　9 月 27 日（木）8:30〜8:40

②対象　児童

③ねらい

模範演奏を聴き、「歌声タイム」を充実させよう

④演奏曲目

《Smile Again》中山真理作曲

⑤演奏者・歌唱指導等

（模範演奏）

松井麻弥、後野あおい、谷口沙也佳、中村来実

（歌唱指導）

西行仁美、後藤佳歩、谷口沙也佳、中村来実

⑥展開（8 月 27 日）

1 1 学期で歌った《すてきな友達》を全校児童が歌う
2 歌唱助言として感想とアドバイスを発表する。
3 《Smile Again》模範演奏

２）

①日時　　2019 年 1 月 7 日（月）
　　9：00〜9：15

②対象　児童

③ねらい

模範演奏を聴き、「歌声タイム」を充実させよう

④演奏曲目

《この星に生まれて》杉本竜一作曲

⑤演奏者

西行仁美、肥後結美子、榎木薗直子、多胡舞香、後藤佳歩

⑥展開

1 模範演奏を聴くポイントを簡単に説明する。
2 《この星に生まれて》模範演奏

（３）分析と考察

・視点①　現場のニーズに応えられているか

現場のニーズとしては「各曲目、女声二部合唱をしてほしい」「子どもたちが『これからあんなに歌いたいな』と思えるような模範演奏をしてほしい」があった。

女声二部合唱という点ではニーズに応えられた。二点目のニーズについては、確かめる術がなく、応えられたかどうかは曖昧なままとなってしまった。ただ、模範演奏をする前に演奏や表現のポイントを説明することに留意したため、見本としての演奏ができたことを願いたい。

・視点②　学習の面はあったか

学習の面については、模範演奏をする前に演奏や表現のポイントを説明する場面を設けた。しかし、これらのポイントがこれからの「歌声タイム」に本当に生かすことができたのかは曖昧である。

・視点③　参加型であったか

模範演奏の依頼であったため、ニーズには応えられたものの、参加型であるかという視点は達成てきなかった。模範演奏の後に、気づいたことや、これからこんな風に演奏したいと思ったことなどを子どもにフィードバックする場が必要であったと考えている。

４．第 30 回『うたとおはなしの会』

（１）実施までの流れ

前年度までの活動としても参加させていただいていたことから、今回も依頼をいただいた。

子どもたちと一緒に歌えそうな曲目というニーズがあった。また助言教員による助言で、パフォーマンス付きの木琴の演奏を行うこととなった。

（２）実施内容

１）

①日時　平成 30 年 4 月 28 日（土）10:30〜11:30

②対象　幼児
③ねらい　幼児に生の演奏を楽しむ機会を持たせる。
④演奏曲目
《森のくまさん》アメリカ民謡　安永早絵子編曲
《アルプス一万尺》アメリカ民謡　安永早絵子編曲
⑤演奏者
安藤光平、中村安穂、谷口沙也佳、後藤佳歩、中村来実（いずれも木琴）
⑥展開

1 幼教の学生による歌遊びや読み聞かせなど
2 奏者登場 幼教の学生の「何か音が聴こえてくるよ」という発言を合図に、ステージ袖において木琴の音を鳴らしその後ステージ端から登場する。
3 楽器等紹介 木琴を紹介し、音色を披露する。
4 木琴パフォーマンス《森のくまさん》の演奏
5 木琴パフォーマンス《アルプス一万尺》の演奏

木琴パフォーマンス

（３）分析と考察
・視点①　現場のニーズに応えているか
　現場のニーズとしては、「幼児みんなが知っていて一緒に歌えるような曲目の演奏」があった。これについては《森のくまさん》《アルプス一万尺》を演奏曲目としたことで、応えられたものと考える。実際に《アルプス一万尺》を演奏している時に子どもたちが一緒に歌ったり、手遊びをしていたりする姿が見られた。
・視点②　学習の面はあったか
　幼児にとっての「学び」は「遊び」の中にある。『うたとおはなしの会』に参加し演奏したことで、幼児らの音楽経験を増やし、音楽や楽器との新たな出会いの場を提供できたのではないか。今回は木琴に焦点を当て、パフォーマンスを含めて木琴のよさに触れてもらえたのではないかと考える。
・視点③　参加型であったか
　幼児教育側からの要望の一つとして「みんなで一緒に歌える」ことが挙げられていたが、実際には歌っている子や音楽に合わせて手遊びをしている子の姿が見られた。幼児にとっては、歌うことだけでなく音楽に合わせて体を動かしたり手遊びをしたりすることも、音楽に参加している姿として捉えられると考える。
　前年度の活動から見えてきたポイントとして、「参加型にするためにはその音楽に親しみをもっていることが重要である」があった。この点において、《森のくまさん》《アルプス一万尺》は幼児にとって参加型の音楽会にするためには適切な曲目であったと言える。

２）
①日時　平成 30 年 12 月 15 日（土）10:30～11:30
②対象　幼児
③ねらい　幼児に生の演奏を楽しむ機会を持たせる。
④演奏曲目
《赤鼻のトナカイ》マークス作曲
《あわてんぼうのサンタクロース》小林亜星作曲
⑤演奏者
安井晴二（カホン）、西行仁美（電子ピアノ）、松井麻弥（歌のおねえさん）、中村来実（クラリネット）
⑥展開

1 幼教の学生による歌遊びや読み聞かせなど
2 奏者登場

幼教の学生の「何か音が聴こえてくるよ」という発言を合図に、ステージ袖において鈴の音を鳴らしその後ステージ端から登場する。

3 楽器等紹介

クラリネット、カホンを紹介し、音色を披露する。

4 《赤鼻のトナカイ》の演奏

5 《あわてんぼうのサンタクロース》の演奏

楽器紹介（カホン・クラリネット）

（３）分析と考察

・視点①　現場のニーズに応えているか

主催側のニーズには、「幼児みんなが知っていて一緒に歌えるような曲目の演奏」「クリスマスにちなんだ季節の曲」「《あわてんぼうのサンタクロース》を演奏してほしい」「様々な楽器が見たい」があった。

これらに対し、《赤鼻のトナカイ》《あわてんぼうのサンタクロース》を曲目にすることで、「幼児みんなが知っていて一緒に歌えるような曲目の演奏」「クリスマスにちなんだ季節の曲」のニーズには応えられた。しかし、「様々な楽器が見たい」というニーズについては、打ち合わせ不足のためにニーズをしっかり把握できていなかったために応えられなかった。

・視点②　学習の面はあったか

上記同様、幼児の学びは遊びの中にある。クリスマスの雰囲気を楽しみながら音楽体験ができたのではないだろうか。また、主催側から要望のあった曲目《あわてんぼうのサンタクロース》は、5番まで歌詞がある歌であり、何度も繰り返すことを楽しく感じる幼児の特性に合った曲目であったと考えられる。

・視点③　参加型であったか

幼児たちは音の鳴る楽器をそれぞれ持って、音を鳴らしながら音楽をきいていた。「みんなが一緒に歌える歌」という視点で曲目を選んではいたが、多くの幼児が一緒に歌えていたとは言い難い。参加型という視点は、楽器を鳴らしながらきけたことによってある程度担保されたと考えられる。

５．南浜児童館

（１）実施までの流れ

南浜児童館から助言教員へ依頼のご連絡をいただき、引き受ける運びとなった。演奏曲目などについては電話やメールなどでやりとりを行った。

（２）実施内容

①日時　平成 30 年 11 月 17 日（土）10:00～10:20

②対象　児童

③ねらい　児童に生の演奏を楽しむ機会を持たせる。

④演奏曲目

《紅葉》マークス作曲

《Let it go～ありのままで～》メンゼル作曲

《ア・ホールニューワールド》メンケン作曲

《夢をかなえてドラえもん》黒須克彦作曲

⑤演奏者

西行仁美（ピアノ）、肥後結美子（ピアノ）、谷口沙也佳（ヴァイオリン）、中村来実（クラリネット）

（３）分析と考察

・視点①　現場のニーズに応えているか

現場のニーズは「秋祭りのオープニングコンサートをしてほしい」であった。オープニングコンサートとして 15 分程度の音楽会を企画した。秋らしい季節の曲として《紅葉》を演奏した。

・視点②　学習の面はあったか

今回の依頼は秋祭りのオープニングコンサート

であり、主に「音楽に親しむ」「音楽を楽しむ」ことを主眼としたため、学習の面はあまり意識されていなかった。

・視点③　参加型であったか

《Let it go～ありのままで～》《夢をかなえてドラえもん》など、児童が知っていて一緒に歌えそうな曲目を選んだ。子どもたちも一緒に歌ってくれた。この場面では参加型としての音楽会が担保されたと考えている。

６．深草児童館

（１）実施までの流れ

深草児童館から本学の幼児教育科の古賀松香先生へ依頼のご連絡をいただき、本プロジェクトが引き受ける運びとなった。

（２）実施内容

①日時　平成 30 年 12 月 22 日（土）13:00～13:20

②対象　児童

③ねらい　児童に生の演奏を楽しむ機会を持たせる。

④演奏曲目

《赤鼻のトナカイ》マークス作曲

《あわてんぼうのサンタクロース》小林亜星作曲

《夢をかなえてドラえもん》黒須克彦作曲

⑤演奏者

安井晴二（歌のおにいさん）、西行仁美（ピアノ）、肥後結美子（歌のおねえさん）、中村来実（クラリネット）

（３）分析と考察

・視点①　現場のニーズに応えているか

現場のニーズとしては「クリスマス会のオープニング演奏」があった。クリスマスにちなんだ曲を 2 曲を曲目に選んだ。

・視点②　学習の面はあったか

今回の依頼はクリスマス会のオープニング演奏であり、主に「音楽に親しむ」「音楽を楽しむ」ことを主眼としたため、学習の面はあまり意識されていなかった。

・視点③　参加型であったか

《あわてんぼうのサンタクロース》《夢をかなえてドラえもん》など、児童が知っていて一緒に歌えそうな曲目を選んだ。《あわてんぼうのサンタクロース》については歌詞を書いた模造紙を持参し、子どもが参加しやすいように工夫した。この児童館では、定期的に歌を歌っていることもあり、みんな一緒に歌ってくれていた。この場面では参加型としての音楽会が担保されたと考えている。

第４章　まとめと反省、今後の展望など

これまで三つの視点を持って活動を行ってきた。

視点の一つ目である「現場のニーズに応えられているか」について、昨年度の反省として挙げられていた「教材として扱われている楽曲から演奏できそうなものを前もって検討し、リストを作るなどして幅広くニーズに応えられるような状況を作っておくこと」を実際に行った。学校訪問の際にリストを提示して、どのような実施にしていくか話し合う時の手がかりにできたことは今年度の成果として挙げたい。

また、謝礼金の制度を利用することで、卒業生の奏者を確保することができ、ニーズに柔軟に対応することができた。

しかし、「うたとおはなしの会」の様々な楽器が見たいというニーズについては、打ち合わせ不足のため応えることができなかった。今後は出来る限りいろいろな楽器を用いて企画できるよう努力したい。

二つ目の視点「学習の面はあったか」については、音楽に親しむことや楽しむことを主眼とした児童館におけるコンサートなどに学習の面を持たせるのは難しかったため、今回行った企画の全てで実施することはできなかった。ただし「音楽に親しむこと」「音楽に楽しむこと」も、生涯学習の視点として考えられる場合もある。このように考えれば達成できているとも捉えられる。また、幼児を対象とする場合については「幼児の学びは遊

びの中にある」ことや「楽器や音楽に興味を示したり遊んだりすることが音楽に対する愛情を深める素地になり得る」という視点を得たことによって、克服できている。

今後の課題として、学習の面を考える際に、対象となる子どもを理解する視点をもつと共に、何が「学習」となるのか、その場面に応じた「学習」を考え企画していくことを挙げる。

三つ目の「参加型であったか」については、京都市立嵯峨野小学校の訪問授業で、身近なものでできる楽器体験の場を設けたことで、子どもたちが主体的に音楽に関わる姿を見られたことは今年度の大きな成果として挙げたい。また、「みんなで一緒に歌える歌」を曲目にできるよう意識することもできた。今後も、演奏をしに行くだけのアウトリーチに留まらず、子どもが主体となるように演出を工夫することを引き続き課題としていきたい。

活動全体としては、昨年度になかった訪問授業の活動を実施できたことが大きな成果として挙げられる。この活動を実施できたことによって、今後の活動の展望をもつことができた。小学校で訪問授業を行った例全てにおいて学校現場のニーズ「楽器の生の音を聴かせたい」に応えることができたと言える。学生側にとっても授業を考案する貴重な経験をいただけた。京都市立伏見板橋小学校の実施後には、校長先生から「今日のこの授業のことは子どもたちは一生忘れないでしょう」というお言葉をいただくことができ、この活動の意義を再認識することができた。これからはより一層本プロジェクトの認知度を上げることで、音楽科と教育現場を繋ぐ活動として機能していけるようにしたい。

また、新たな取り組みとして、児童館に出向いて子どもたちに生演奏を届ける活動ができた。子どもたちに生涯学習の視点をもって生演奏を届ける活動として、これからも活動の幅を広げていきたい。

＜参考・引用文献＞

（１）松本 菜摘,河添 達也（2015）「小学校音楽科における「教育プロジェクト型アウトリーチ」の授業開発研究」『島根大学教育臨床総合研究』島根大学教育学部附属教育臨床総合研究センターpp.181-190

（２）林睦(2009)「音楽のアウトリーチ活動に関する一考察―日本における導入 10 年と今後の課題」『音楽教育学の未来』音楽之友社, pp.280-290.